



空想雜記



TAKA

自分の心を書きとめよう。

その時々心に浮かんだこと。

口に出さなかった言葉。

伝えられなかった想い。

そうしたものを、書きとめておこう...

少しずつ、自分をごまかして、幸せを手に入れてきた。

誰もいない公園。

見事に咲いている桜を見てドキドキする。

私のために咲いているわけじゃないけれど。

何だかひとり占めしているみたいでくすぐったい。

別れ

男が立ち去り際、テーブルをひっかけてコーヒーカップが音をたてた。

「ガチャン」

それだけで、この男のことが数倍嫌いになる。
神様に「別れて正解」とお墨付きをもらった感じ。

別れて正解。

誰かの後ろについて行く、
そんな生き方しか知らなかった。

私は静かに沈んでいく。

映画の「タイタニック」じゃないけれど。
美男美女が愛を語っているその横で、
誰にも気付かれず、
誰にも助けてもらえず、
私は静かに沈んで行こうとしている。
私のレオナルド・ディカプリオはどこなの？
こんなに冷たく、
こんなに凍えて、
私は今にも死にそうなのに。
もうディカプリオじゃなくてもいいから。
誰か助けに来なさいよ。
ていうか、誰かひとりくらい気付いてよ。
私はこんなに傷ついて、
今にもおぼれそうだっていうのに...

私は静かに沈んでいく。

海の上の光の世界をながめながら。

乳房の思い出

いまでも後悔していることがある。

小学生の時、伯母が乳ガンの手術を受けた。

まだ30代だったと思う。

摘出して無くなってしまった胸を「見せてあげようか」と気軽に言う伯母に、僕は答えることができなくて、母親の背中に隠れてしまった。

その時伯母は笑っていたけれど、本当は傷つけてしまったんじゃないか。

僕は無くなってしまった伯母の乳房を見るべきだったんじゃないかといまでも後悔している。

伯母夫婦には子供がいなくて、妹の子供である僕を実の子のようにかわいがってくれた。

でも、小学生の僕は見るのが怖かった。

あの時怖がってしまった自分が許せない。

伯母は40代でガンが再発して亡くなった。

冬眠する時のコツを教えよう。

まずじっくり時間をかけること。

たらふく食べて脂肪をつけること。

ちょうどいい場所をみつけても、すぐに決めないでじっくり観察すること。

どんな動物が周りにいるのか。

風は吹き込むか。

寒すぎやしないか。

水飲み場までの距離。

日当たり。そしてニオイ。

どれかひとつでも気に入らなければきっぱりあきらめてサッサと次の場所を探すこと。

ちゃんとピッタリの場所がある。

それを信じること。

こだわりは大切だが、執着はしないこと。

ほんのちょっぴりでも疑わないこと。

春が必ず来るのと同じくらいに、それは自然なことなんだと理解すること。

それが冬眠する時のコツだ。

僕たちは何度も間違える。

その度に引き返してやり直す。

何度でも何度でも。

あきらめない限り、チャンスはいくらでもある。

結婚式

「花嫁さんがお呼びなので来ていただけますか」

式場の制服を着た彼女について行くと、純白のウェディングドレスから真紅のドレスに着替えた妹がドアの外に立っていた。

イラだっているのが厚い化粧の上からでもわかる。

なんてったって18年も一緒に暮らした仲なのだ。

「どうした？」

僕が訊くと同時に彼女はまくしたてた。

「どうしたじゃないわよ。いったいどういうつもり？」

身に覚えのない僕は当惑するしかない。

「何のことだよ」

式場の人も困っている。

「彼が気にしてるのよ。あなたがずっと仏頂顔をしてるから。何か気に入らないことでもあるんじゃないかって」

僕は黙った。思い当たることがあるからだ。

「何が気に入らないっていうのよ？」

気に入らないことはたくさんある。だがどれも手遅れだ。手遅れだということも気に入らないことのひとつだ。

「別に」

僕がいうと妹の眉が釣り上がった。よくない傾向だ。

しかし妹の結婚式で、兄キはいったいどういう顔をしていればいいんだ？

何が幸せで何が幸せでないか。

それは誰にも決められない。

笑顔で暮らしているのなら、それだけで充分だ。

空想雑記

<http://p.booklog.jp/book/29006>

著者：TAKA

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hakwsbook/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29006>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29006>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.